賀北部隊で見た原爆

吉田　守三

私は戦争中は海田の日本製鋼所に勤めとりました。もっとも原爆の前、六月の末頃召集があって、西農で賀北部隊に入隊し、広島の幟町国民学校に駐屯して教育訓練を受けとりました。原爆が落とされたのは、除隊して帰ったばかりでした。私達と交替に召集をうけた、賀南部隊は幟町国学校で被弾し、殆ど全域の状態だったそうです。八月六日の朝は、除隊して帰った翌朝で家におりました。そしたら西の空がちょうど鉛を溶かしたのを流したように光ったかと思うと、なま温くい風が来たんです。ここらでもなんか温かったですよ。こりゃーおかしい、何ごとじゃろうか？。思って見とったらダーッと雲が上がってきたんです。

その晩すぐに賀北部隊に召集がかかりました。急いで西農へ行ってみると、まだあまり集まってはいませんでしたが、そこで「広島にピカドンいうものが落ちたんじゃげな」いうことを耳にしたんです。ピカドンがどういうものかこっちは知りませんし、何のことやら解らんのです。

そしたら西条駅に藤乃家、という旅館がありますが、そこが戦時中は保健所になっとったんですが、そこ(保健所)へ「負傷者が戻るから、西条駅へ行け」という命令を受けて、駅まで行ったんです。それで負傷者が着いたのをみたところが、皆真っ黒になって男か女かも判らんのです。私らは「これはどうしたんじゃろうか、火薬庫が爆発して、煙にまかれてこんなになったんじゃろうか？」などと話しとりました。そのうち「そうじゃーない、ピカドンいうものでやられたんじゃそうな」いうことが判りました。

とにかく救護所の藤乃家までは連れて戻ったんじゃが、手の付けようがない。やけどして真っ黒になっとるし、なかには皮膚がズルッと剥げてぶらさがっとるのもおる。本職の医者でも手をよう付けんいう有様でした。

あくる朝、賀北部隊は汽車で広島入りしたんですが、それまでに広島の繁華街をみとるでしょう、それが着いてみたらなーにも無いんです、ホームもない。一面の焼け野原で「あっちに一つビルが崩れずに残っとるがどこじゃろうか？」「こっちの鉄筋はどこじゃろう」いった具合です。遥か向こうの己斐のあたりで、大きな倉庫がまだくすぶり続けとりました。「大方軍需品を積んどった倉庫じゃろう」などと話したものです。

駅から饒津神社の前を回って、縮景園のむかい側の土手の上を、牛田の奥、山

の方に向けて行軍して行きました。水源地の横を通って山に入ったんです。途中縮景園の前の川には、ちょうど引き汐だったんですが、大勢の男や女がみんな裸になって川水に漬かっとりました、恐らくやけどした身体を川水で冷やしとったんでしょう。

賀北部隊の着いた牛田の山の中には、たくさん馬がおるんです。軍馬の離れたのを集めたのかと思って近づいてみると、なんとこれが半身光線のあたった側をやけどしとるんです。反対側は何ともないのに、片側はやけどして毛もなく赤身が出とりました。でしばらくその被爆馬の世話をさせられました。

それから今度は救護班で、工兵橋を渡って市内に入りました。工兵隊の焼け跡かどこかの広場に、テントが張ってあって負傷者を収容してある。中に入ると頭を中にして両側にずらっと並べられとるんですが、狭いので真ん中の通路は無いような状態。携帯天幕ですから人が立っては歩けんぐらい天井が低い、中はムンムンして暑いんです。「水をやってくれるな」と言われとるので、負傷者が「水みず･･･」というが「我慢せい」いうだけで水はやれません。こっちから見れば、なんともないようなのに反対側は、熱線を受けて大やけどしとる。よく見てみると、そのズルッと皮の剥げた傷のところに、一センチ位のクジがわいとるんです。生きとる人間にウジがわいてウゴウゴしとるんです。それを見たときには思わず寒気がしました。「戦争いうものは恐ろしいもんじゃ、むごいもんじゃ」とつくづく感じました。「何のために戦争するんじゃろうか」と考えました。本当に哀れ千方、ひどいもんでした。

牛田に行ってしばらくは、私ら 10 人ほどが炊事当番を命じられました、志和と板城の人がいたのは覚えています。ドラムかんを切ってかまどを作り、平口の大鍋を掛けて炊事場は作ったんですが、水が十分ないんです、川は遠いし、とにかく水をしまつしようということにしました。それで何を炊くのかというと、俵に入った玄米を持ってきて「これを炊け」という。水はないのだから十分とぐこともできんし、わらゴミなど残ったままで炊くんですが、ばさばさの飯で食べられたもんじゃない。おかずも「これで汁を炊け」と渡されたかますを開けてみれば、黄色どころかもう赤うなったズワズワの胡瓜、味噌もないし塩で味付けしたが、今から考えれば牛か豚にやる餌を食べとるようなもんでした。それでもアルミの食器についで出せば、皆残さずに食べとりました。

ところが私らのいた所は、牛田でも山あいの被害を受けていないところで、宿営地の少し上の方には無傷の農家がある、そこへ行って事情を話して踏み臼を貸して貰った。交替で玄米を精白して炊いて食べることにした。無論部隊全員が食べるだけはつけんから、自分らが食べるのだけを白くして炊いとりました。そのうち農家の人が「おかずも無いんでしょうが、これを持って帰りんさい」と言って茄子やら、かぼちゃなんか野菜物をくれるようになりました。有難く戴いて、

これも別鍋で食べました。皆には言われんのじゃが、まぁ炊事係の役得でしょうよ。

そうこうしとるうちに、八月十五日の朝になって、天皇陛下が今日の昼に、重大放送をされるというニュースがありました。間なしに敵の飛行機が低空で飛んできて、旋回して飛び去りました。私らは「敵機が低空でデマ放送して行った」などと話していたら、「将校は重大放送があるから、重要書類を持って連隊本部に集まれ」いう命令で、将校は皆でかけました。「どうしたんじゃろうか」と話しとると将校が帰ってきた。見ると皆顔色が変わっとる「日本が敗けた」いうたなり薬用アルコールのピンを持ってきて飲みだした。しばして私たちが気がついたら、現役の将校はどこえ消えたのか、一人もいなくなっとりました。

私たちは私たちで「戦争に敗けたのなら、帰ってもよかろう。用事はすんだ」いうことで帰る算段ですが、「帰れ」 いう命令を出す将校がいない、翌十六日になってやっとそれが出て、駅まで行ったがなかなか列車が来ない、やっと来たのを見れば超満員。それでもみんな帰りたい一心で少しのすき間でも割り込む、機関車にもさばりつくようにして、やっとその日の夕方に西条に辿り着きました。

原爆のものすごい力いうか、恐ろしさいうか。七日の日に牛田に向かって行軍しとる途中で見たんですが、自動車が道端の石垣に叩き付けられて、ペシャンコになっとるんですよ、川端の道を走っとって強風でやられたんでしょうが、そりゃーひどいもんですよ。

私はテントの中に寝かされていた人たちを手を合わせて拝みたいような気持ちでした。男も女も、年寄りも子どももおられましたが一様に身体を焼かれて、傷口にはクジが這いよる。うわ言のように「水、みず･･･」いうのに水はやられん。「戦争の犠牲といっても、あんまりむごすぎる。もうこういうことが二度とあってはならん」そう思いました。

復員して帰ってからは、そんな地獄を見たからか、疲れが出たからか、しばらくは食欲が無く、仕事もできんのです。今考えてみれば、それも知らずに放射能を浴びたためだったんでしょうが、半年ほどはとにかく身体がしんどうて、すぐ疲れるような毎日でした。それでも知らないもんですから、検査も受けず、ただ民間療法を続けただけでした。

その後被爆者手帳を受けてからは、被爆者検診も欠かさず続けてきたのですが、八十歳を過ぎてから、あの時の影響が出てきたのか調子のよくない日が多くなり、不安な日々が続きます。政府が一日も早く被爆者援護法を制定して、私たちが安心して暮らせるようにして貰いたいと思います。

最後にくどいようですが、あのむごい戦争はこりごりです。二度と戦争はしないという憲法第九条を守り、子や孫たちが「核」の悲劇を経験しないようにして欲しいものです。

原爆被爆者救援の賀北部隊

光本　充晴

私が、西農三年生に在学中の昭和二十年八月六日、米軍によるあの原爆攻撃の日の午後、突然先生に呼出され、当時の西農寄宿舎北寮に集合するように命じられました。集められた者は二十歳前後の若者と、在郷軍人の下士官で、簡単な召集令状とか、在学中の者は先生からの伝達により、賀北部隊という速成の軍隊が出来ました。

集合後、直に部隊編成が行われ、正式部隊名を「広島地区第一特設警備隊」。通称「中国第三二〇五〇部隊」といい、買北部隊は俗称であったようでした。

私は工月中報（中隊長 工月 清）第一小隊（小隊長 柏尾 誠）でした。中隊は三ヶ小隊で編成され、 総勢百二十名位であったようです。二～三日後に高和中隊が召集されたとの事でした。部隊編成後工月中隊は、半死半生で西条駅に到着する原爆負傷者を西農講堂・西条小学校・お寺などに収容する任務につかされました。

しかし本来の任務は「郷土防衛部隊」であるらしいという事が誰からとなく耳に入りました。

そもそも「郷土防衛部隊」なるものは、当時太平洋戦争で敗退につぐ敗退の日本が、やがて米・英・豪を主力とする連合軍を、日本本土で迎え撃ち、国の存亡をかけた本土決戦となる事を想定し、かねてより準備されていたようでした。従って我々は原爆負傷者の収容のみならず、暴動など社会的不穏な動きにも対処するようにと言い渡しがありました。

夜半になって西農北寮で仮眠し、工月中隊は翌七日早朝五時、西条駅より車に乗り広島方面へ発車しましたが、 行き先は九州という話もあり、いや山口という人もありました。我々一般兵には知るよしもありませんでしたが、部隊指揮班は出発前に命令を受領しており、部隊を広島市に移動し、地区司令部を捜して、その指揮下に入り行動せよという事でありましたが、六日に出発した下士官もあったそうです。

列車は途中で度々停車しながら海田市駅に到着しました。それから先は列車不通のため下車して中隊長以下全員徒歩で広島に向かったのでした。途中、原爆による負傷者が続々と難を逃れて来るのに出合いましたが、その様態は衣服はボロボロ、焼けタダレた皮膚がぶらさがり、大きな火プクレなど、さまざまで、

交天下を息もたえだえにただ黙々とうなだれて歩く姿は筆舌に尽くし難く、この世の様ではありませんでした。

どこをどう通ったのかたしかにおぼえていませんが、尾長町の街並みは残っていました。その向こうあたりから煙が立っていました。広島駅の前まで行っておどろきました。広島の街は一望千里の焼野ヶ原となっており、福屋と思われる建物のほか二、三の建物のみ残っておりました。駅や附近一帯には負傷者が満ちており、川には火を逃れ水を求めたのであろう人の死体が、たくさん浮いていました。

我々が広島駅から西練兵場を通り師団司令部へ向かう途中、傷つきたおれ、夏の太陽で燃えるような一枚のトタン板の陰から『兵隊さん水をください」と、うったえていた人！『水をやるな、水を呑むと死ぬるど』という命令で見過た人もありました。そして負傷者収容に舞いもどって見ると既に死んでいました。どうせ死ぬるのなら何故あの時水を与えなかったのか、思い起す度、いまだに涙をおぼえてなりません。こんな人達は随所におられ、一時に救助できる状態ではありませんでした。

また、広島城の濠にもたくさんの死体が浮いており、異臭が満ちて、爆撃から一夜明けてなおも広島の地は地獄の様でした。この濠に軍馬が一頭人っており、皆んなで助け上げようとして呼ぶと、こちらに来るが、途中からまた向こうへ行くので、よく見ると目をやられて見えないようで耳も聞こえなかったのでしょう。前足でバタバタと懸命に水をかいて数回行き来しているうちに遂に沈んでしまい、哀れでなりませんでした。

部隊は西練兵場、師団司令部一帯の負傷者の収容、死体の処理にあたる事になり、まず負傷者を本川分岐点附近の川土手にあった仮設病院に運びました。皆んな大火傷をした人達ばかりで薬もなく、多くの人が死んでいきました。負傷者の収容は二日間位で終わりました。その頃になってこの広島空襲は『特殊爆弾』によるもので七十年間は草木も生えないと言われ、『ピカドン』という言葉が生まれました。

三日日頃から死体を集めて身元を調べ、防空濠の穴に、壊れて散乱している材木を集め、その上に三〇～五〇体ぐらい並べ、そこかしこで毎日火葬しました。場所がら兵隊さんが多く、挺身隊の女学生や一般人もまじっていましたが、姓名身元などは殆どわかりませんでした。四～五日目頃から死体は大きくふくれ上り、傷が腐りウジがわき、悪臭はあたり一面に漂い、皮膚にさわるとズルッとむげて集めるのに難渋しました。

我々の食事は、玄米に近いような塩気の無いボソボソのむすび一・二個で、初めの二日間位いは副食もなく三日日頃からタクアンやコブの佃煮が少々つきました。初日は、暑さと疲労に加え死者・負傷者の累積するすさまじい光景に、む

すびは喉を通りませんでした。二日目頃から空腹と慣れで、食事が出来るようになりました。

二〜三日目頃から下痢・発熱の兵が出始め、三名ぐらい帰西しましたが、今にして想えば放射線の影響だったと考えられます。

夕方になると中隊は歩いて、長束あたりに行き、民家の軒下や縁側・納屋などを借り筵を敷いて寝ました。体を洗う人は太田川に入ったように思います。それでも体や衣服についた死臭や火葬の臭が漂ってなかなか眠れませんでした。

そんなある夜、たしか九日だったと思いますが、B29 の米軍機編隊が東の方へ飛んで行きました。後で知ったところでは福山の空襲だったようです。

炎天酷暑のもと、汗と埃にまみれ、着替えもなく、洗濯も出来ず、負傷者収容につぐ毎日の死体処理に、兵は皆な疲労困憊し、ただ黙々と足どりはダラダラと、死体を集めては焼きました。戦争とはいえ、見境いもなく一般人を巻き込んだ、むごたらしい米軍の原爆攻撃に、皆んなの胸はいい知れぬ怒りを持ったようでした。

八月十三日、工月中隊は広島での任務をとかれ、広島駅に行くと駅舎は外部だけ残り、おおよそ整理されており、我々は汽車で帰西し、西条到着後、ただちに中隊は解散し、家に帰りました。

その後、隊員の中には脱毛・下痢・嘔吐・発熱などが続き苦しんだ人がかなりおられたとの事でした。幸に、私は直ぐには何の症状もありませんでしたが、一年半あまり後にかなり重い黄疸になり約一カ月療養しました。

昭和六十二年（一九八七年）春、NHK 広島放送局の北出 晃 氏をチーフとする原爆プロジェクト・チームが東広島郷土史研究会（会長 宮川忠孝）の協力により、原爆放射影響調査の集団として、賀北部隊の全容を掴み、四十二年前の惨状を『ヒロシマ、残留放射能の四十二年　原爆救援隊の軌跡」と題して、収録放映されました。

これを契機に、元賀北部隊有志が前記研究会のご協力により「賀北部隊・原爆被災者救援之碑」を西農北寮跡に見合う東広島市中央公園内に建立しました。かつての賀北部隊の人々が原爆のおそろしさ、無惨さ、非人間性を、後世に語り継ぎ、原爆のあかしとして永世平和を祈念し、筆をおきます。

賀北部隊の思い出

北田　正義

原爆被災者救援作業

昭和二十年八月六日、原爆が広島市に投下されて間もなく、広島連隊区司令部からの命令で質都北部地区（賀北部隊）が編成されました。その内訳は、陸軍予備兵役の軍人（当時十七歳から二十二歳まで）の未教育兵として召集命令をうけました。部隊は陸軍部隊でした。

召集命令をうけた当日（八月六日）夕方、西条農学校に集合せよとあり、急いで身の廻りを整えて西条農学校に直行しました。現地に到着すると、部隊の仮兵舎として西条農学校があてられていました。

この仮兵舎で部隊編成が行われ（総員二百名ぐらいだったと思う）賀北部隊としてニカ中隊が編成されました。

私達は第一中隊になり、翌朝八月七日午前五時西条駅発の列車で賀北部隊は広島に向いました。

海田市駅まで車で行き、海田市駅西は線路不通のため汽車では行かず、海田市駅から徒歩行軍して広島駅北側にある東練兵場まで行きました。そこで一時休憩をして（十分くらい）広島城跡内を通過して西練兵場内にある連隊区司令部に到着し、私達第一中隊は司令部の命令をうけて直ちに作業に取りかかりました。

その作業とは、広島城跡を中心として日中は被爆軍人の死体の整理及び焼却活動を行ない、夜は長束方面の民家の庭を借りてそこにテントを張って宿泊しました。例年の通り八月は大変暑くて死体も二日、三日と日がたつにつれてその死体の匂いが何ともいえない、いやな匂いでした。その匂いも三日、四日と日がたつにつれて私達の鼻がばかになってか全然匂いが気にならなくなりました。

そうする内に八日間の作業も無事に終えて全員元気で広島駅より汽車に乗って西条駅に到着し、到着後直ちに部隊解散になり、そしてみんな我が家に向って帰って行きました。いやいや、とてもとてもそれは大変でした。私達十七歳から二十二歳までの青春はいったい何だったのでしょうか。国民皆兵、お国の為が青春だったのでしょうか。戦争が青春であったのでしょうか。

それからまもなく終戦になり、終戦と同時に日本国は復興に全力を上げて今は立派な平和国家が築きあげられました。これからも一人ひとりが力を合わせて平和日本国を守って行きたいものです。